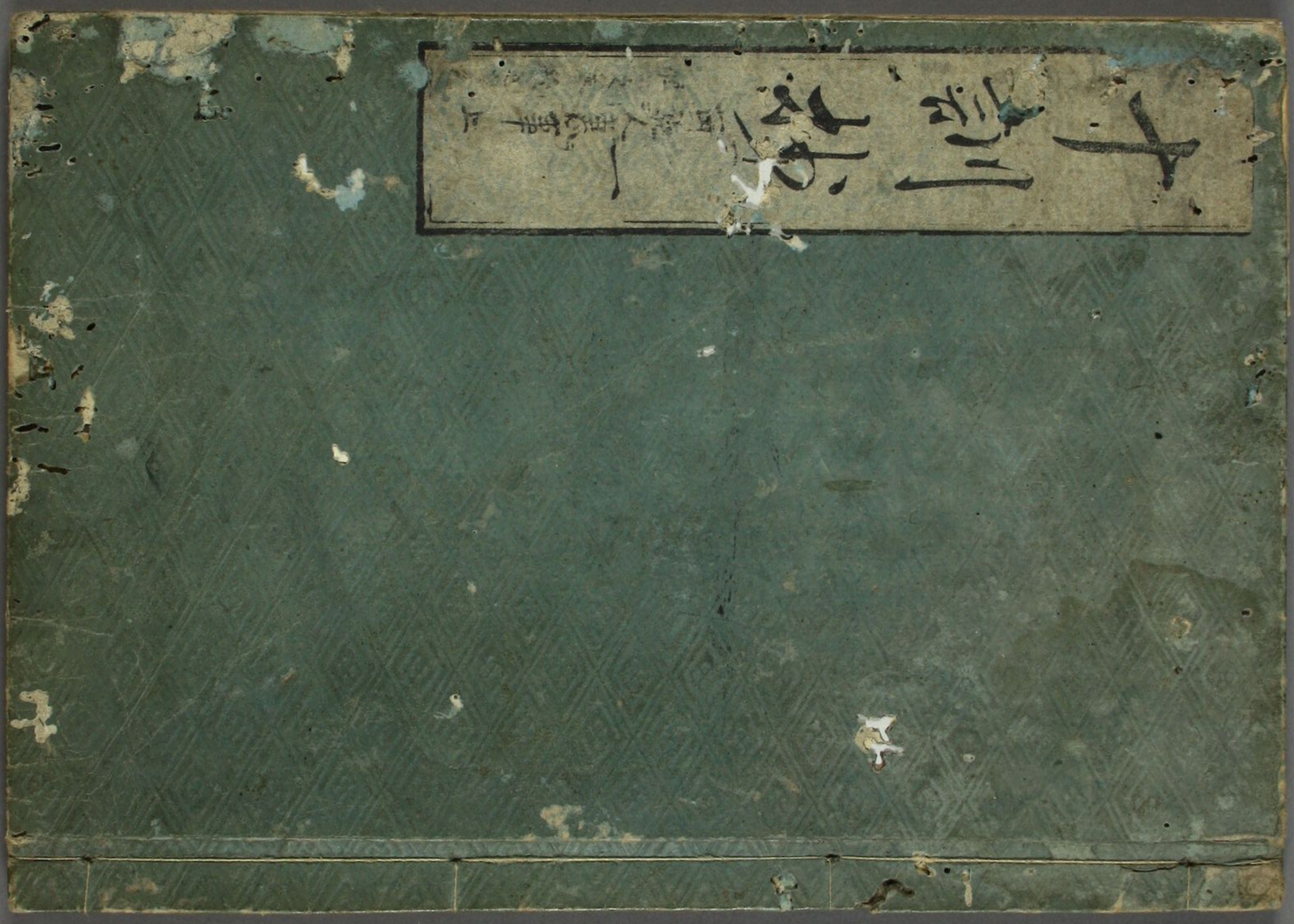


畫添

十訓抄

摂陽　書堂礒野氏藏版

宮城
藤井家
圖書

宮城文庫
石田藏書
宮城文庫

十訓抄序

夫世中にあるゝ人さゝやつさゝ事紀事ゝまいはまて高紀賤さ不紀ますす賢なるい得多く愚なるい失多しさるる不今何とれく同見る事の昔今の物語をゝ採てよろつに言乃集の中より新真二の紙面くまれ方とい是をすめあきらとい是を識わていまゝ此道紙学いさるゝ作人世年のくしをして紙はくる侯とおさしめ今ゝあ試ゝ十訓の篇を

魏ノ董遇曰
冬者歲之餘
夜者日之餘
陰雨者時之餘

ふらて十訓抄とゝのたく則三巻のまゝにして三
餘の窓に置とゝのり其詞和字にされとして必れ
業乃はゝ抄ゝ抄ゝ仮名乃日安ゝん事紙
抄乃上数也其例漢家をはめてかしして廣く道
を訪ゝと聞ゝの耳に近ゝをゝと思数也ゝ人て
是紙云ゝ耳ゝさ詞をかさゝに只實乃ゝゝを
集む道乃傍の碑乃文をいさゝい孫ゝいさゝ而也
但ゝれさ身を顧ゝ秋の螢ゝ光を集ゝは
ゝ月の雪ふゝく書ゝ書のさゝはゝ紙

三業
身口意
真如

学ゝれゝ絲竹の曲ゝ藝ゝ紙ゝをゝ
なゝと事ゝして徒ゝあゝさの塵和をゝる
けゝ也ゝゝゝよゝまて言ゝが草ゝきゝまれ
ゝゝのゝも数ゝ掉ゝ人乃嘲ゝ耳也
なゝゝ志乃ゆゝ而ゝゝいゝやゝをゝてゝし
祈ゝやゝゝすゝの松ゝをゝゝ口業の因を
ゝれさ徒い賢良ゝ諫ゝゝゝい仏教ゝゝむゝ
ゝ似ゝゝゝゝも聞ゝ法ゝ實相乃理を業ゝ
ゝゝの粗言綺語乃戯ゝて讃仏乃縁也

いとやすきなりとかなる紙きぬに直しきとすむる
有をのはゝ法門乃意ゝ相叶いさんや書
何乃憚うあん依之建長四ゝをのゝ神
無月のまゝ乃比をめつゝ暇のあさ毛閑なる
折ゝ乃みあゝはゝ草ゝ乃庵を東ゝ乃蘭ゝ
ゝ乃ゝく蓮の墓を西土のまたらむ新念仏の
しるに是紙ゝ乃ゝ修ゝとゝ乃をいつゝ

仏書仏者を題するを下とゝ乃ゝ仏師ゝ乃ゝ
京都特賀宗尊親王の勅ゝ乃ゝ執権職北條文代特賀之ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ古今芳問ゝ乃ゝ序まれ
天下ゝ乃ゝ仏ゝ乃ゝ修ゝ乃ゝ建長ゝ乃ゝ年ゝ乃ゝ序ゝ

十訓抄

目録

第一　可施人恵事
第二　可離憍慢事
第三　不偏人倫事
第四　可誡人上事
第五　可撰朋友事
第六　可存忠直事
第七　可專思慮事

仏教年中行事の書に用目録の十例物菩提長とゝ乃ゝ
仏ゝ乃ゝ乃ゝ乃

第八　可堪忠干諸事事

第九　可停懇望事

第十　可庶幾才藝云事

著作年代　後深草天皇建長四年（紀元千九百十二年）明治三十四年ヨリ溯リテ数ヘルヲ六百年ヨリ鎌倉末北條時頼執権時代ヨリ

著者　菅原為長、橘成季、六波羅二條左衛門入道ヲモト伊説

十訓抄

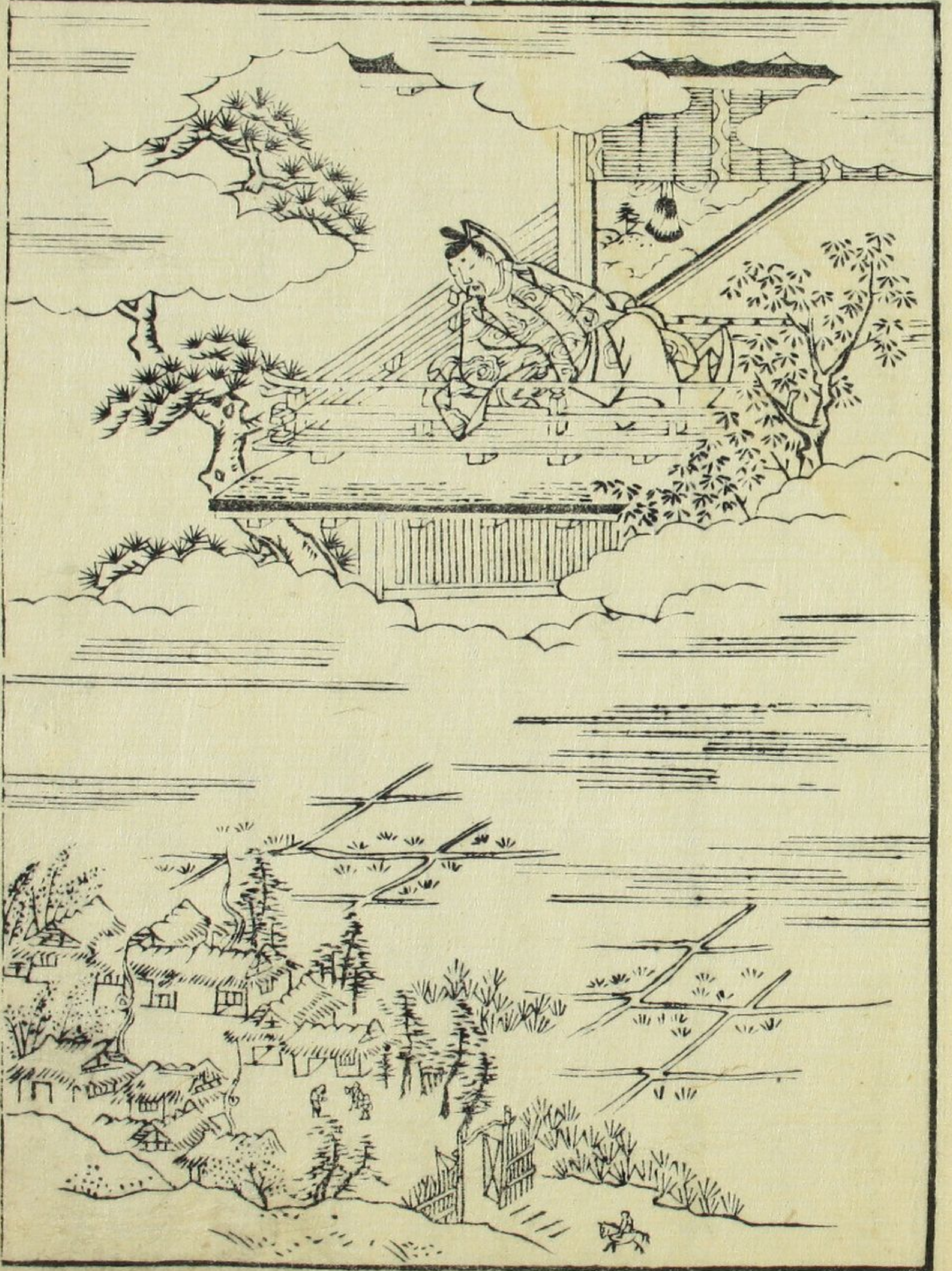
第一　可施人恵事

或人云人乃君となるものは物さるものにならんも不可懸文云ふはちいさき壊をゆるしなば故に高き事紙ちりを海い細さ蟻をいとなば世故に深きことを山にいとまなく明まの人をすて給ふ事車紙造る工乃材をわまさるれ木をもて曲れるを縄を紙も用ゆるを人の合物紙蟻の事わまべ其身必ずとなるを物を勿て大人い賤を紙蟻の人ゆゑと人をくらい抄をしてを紙しけまばとて

謬て賞をもとさびあくくれしづくて猥く刑をもくらく
どして蒙く均さ免ぐこと紙格とぐこと也又人こと一
度のとがあれば重き罪を行ふもよくさることを
有べし猶漢と云賢なれる獣をのぶこと一躓のなの
やまりをもよあらば人としてもを弟の真理をそれ
まをもたれば文を云るがおくく少過をゆるして賢
才をえんべしこと也其器あまくびこと及ばざるべし
ちかつ不及者紙をうて要紙をあうこと紙
咽て其禄とらむゆふこと退くべし其故い侯
人物あまべ忠義のこと用ゆどこと諫諍の志

さ孔墨のさをもまねくれど胸ゆまべ不忠
乃輩いをこうをさけの浪よあらば只不覚をんものく
ゞ紙ゆうて結ぶれ密紙もいうれひむぐむべ
しかなり

一 仁德天皇ハ三年乃間ゆうさ物紙ぐめて民乃
烟の賑つる紙ぢをまし一円軒オ一ヲ古事後後古事後ヲ
脫ゝ四海乃民をゞひゆうあ吾猶あくうなるぐり
らばくて作ゝまくる是ゝまく賢王聖王の善ゝ治
惠紙黎元黔首まぐあ乃ゝ古今不易故
ちり君い民ゝて鮮ゝ王い非民をゞ



ともしていづれとわれいざしん近ごろ後京極摂政良経兼実四男

かくぞよみ給ひける

おほふべき袖こそなけれ世中にまづしき民の冬の夜な〳〵

されば聖徳太子十七ヶ条憲法には国に二人の君なし

民に二人の主なし率土の民御門をもて主とす所の

の官司は帝の民なれば是をもて敢て公家と共に百姓

をおさむべきものを様に帝徳よい吏民は国のされ

は君の本なりとかくぞよみ給ひけるにや

まつりごち給ひし

㊁ 舒明天皇子 八千代の松 葦垣草子 袁文様抄にも有 飛鳥京便風抄記に有し

天智天皇 世をしろしめして給事ありて近江国上

壁那翁金とつゝ一所のゝ中に黒木の屋を造りてお
くりける紙本丸殿こそ国本にて造始延々大業會
乃時黒木の屋こそ小野の府場所にて造始の
例なり民を如何さべき造と候綸なるべきこと
なり唐堯乃宮は土階をもつて用い萱の葺をき
らざるを例也きそうの本丸殿に用ゐをしらべし
くれば入木はくれどうのうをしまう
翁金や本丸殿に我をれいなのうをはく行いなる
是天智天皇の清者也これを民ども同ぐりそうし
神ようゝゝ也其国乃風俗の曲ようゝひゝる紙延長帝神系の

神皇譜
天の狗をやわれに
水を世子くをは
ようかけ者をり
くをはようかけんや

続茅国乃風俗の曲ようゝひゝる紙延長帝神系の
ゝもくらをゝるふゝひゝるゝもゝうゝるゝゝり
其沼も同清時くらくらゝ秋ゝるゝぞ翁金ようゝるゝて
ゝでゝゝ曲ゝり昔ゝり四のゝゝんよゆゝゝてよゝゝゝゝ
をゝとゝするゝゝゝゝゝゝきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きおく上下鶉をいゝゝゝ塔婆のゝのゝゆゝゝゝゝれ
ゝゝゝゝゝゝゝ清暑堂乃清神楽ゝゝ斎信公任
大学寮の物ゝゝゝ紙ゝゝ物ようゝつきゝゝゝく定頼ゝ
翁金をいゝゝゝれゝゝ崇徳院傳法ゝゝゝゝゝゝを
ゝゝて怪綸乃出仕者あゝれようゝゝき事ゝゝゝ

夏育孟賁の力
蓮如と申さう

晉武帝の宮人

いひはくさぐさ美妙をつくしたる聖の宮をうづ
妹の彼院うさつひろる紙ちいあく只ひろ国へ
ちて清水へいんとをれども武士たちがてうのいざ
ちうつふをみて物もいわぬ睦ふ御くろ
ぐみさる水千きうる人の内より出うる使う
つうくいてそれい草ちぐう秀源くして人言せ
どつみくく物れし陵園の配妾ぐ月よ御細さし
れの扉の中にもうくやうもんを見てくるとぐ
うも立物く板のうちにうくく見まつ入ようて有
はる人ようをう

邪金や木の丸敷に入ようを見ものうれて海の出うさ
は男わぐれく降うて是をれとつ行うとつ入ようてこれば
ものうを只いうにうくを入ようをれも弱をる海土のれをのこそ物
つみくくれてやいはいれてあうこうさうとちを
部伯が改のやいうあり国に別民耳棠の神をす羊祐ゲ
京れ廣うう門容視亭の碑とをもてううをれあ
ふ海でもちをけみるてうを見れぐうみぞちうる
ちをうちあるん人も情をうれとすぐ人紙と思ま
すも我情氏都さは人うをうて明人あうれば思と
して報ぐぐというう廉頗ゲ井うとれうて匿

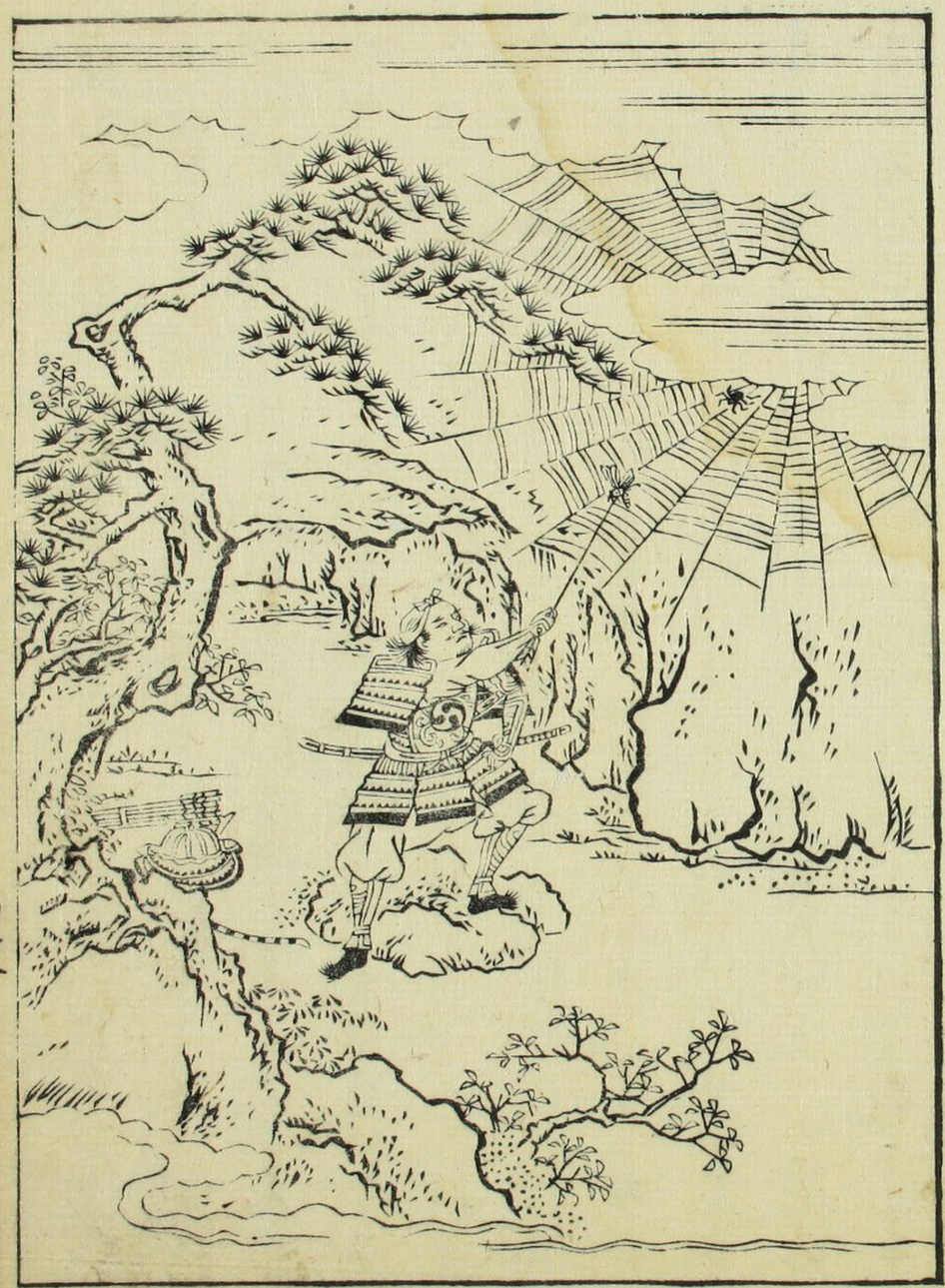
人乃ゑにようて今の世よりあらべくらるよりそうらぐ
らぐ仰ぐぐ蘭相如の心にうぎうんやみどりよい親
やしつ敬をもつ孫ぐもは情をもんまくもそもそぐよ
六富いうもこをもを弟へ孫ぐもあれを知てもつれ
いくんや乃ある人傷とうや倉出のそぐひ愚紙知れる
さうう是ぐ漢武帝昆明池うあそびあまう
一乃鯉の紙をうもでもうんとうるのう帝うれと
ぐく人をもをれるのうの其夜帝夢中よ
鯉来て恨びうう次の月池よ幸ぐまひうるん暗月
乃鯉の明月珠を含ぐて池の色よ変て出ぐうの

けう彼池乃泊渓をうぐめう紙うう
三 隋侯中ぐれう蛇をみく薬紙はまをいやと蛇
をうう出れ後ぐ珠紙含く報と隋侯珠
をもて家富栄ぐう夜之の珠ぐて其石くうる
ぐもうのうれぐ楊寶い黄雀乃疵とぬすけ
うう其報をうを孔愉い白龜の含紙いけてな
刷を保ぐう我紙ぐい
四 越前寺高房ま
山法中納言龍ぐ出くぐう紙うう道う移何
れぐうんぐもをる龍紙賞く紙ぐうぐうのう
若王のこうぐうう紙異ぐまう紙継母めのく

りゑ人なく取くづしなりあやまちの中にて海に
おくり入る中納言あさましかりけるを
取そこの奥と申しのきて紅のくれなゐ垂るくれば
くるまあぎてぐり毋事如夢僧都の物がたりて
人ぐふしきりうこゑ不書蜂とりて出もと
うほかあしわう

（五）ひとり中納言和田丸と申す人ひとりうり長束
り余古大まこいつ云者ものうり身はこ偏れ市
の側よ城と仕りて粉いつかもしてゐるなる
妻のうれよとうり扶て城も仕き参とうりぐを

打先ゆくりのりうじて命ごろいりく初瀬このおく
り籠てうり歌あうり求れど深く問云して笠
置いつこもの岩屋はれ方もる中にうれして二三日
住ゐうれど岩おりにく蜂こいつるのいかもう
けるふ大なる蜂のうるもうあるみいをうりけ
てきれこうんとしけるほうり懸をおうてうて
うれらて蜂よいくうるやいあるいかいるてる
物のこ笠世乃成ゐすくなくて富まこはれた
ものは金銀惜みくるの人ようつ恩分くくる
事はじうるべし我歌みやうり扶くうさう分る



所をはなれて海が金氏をすまそうとおもひたち秋
なれば故らゆうの真夜の夢みのさの水千鶴丸秀
ゑる男のうそいつゆう書の作者く耳よりあり
ける市志賀よ赤しい我けいれさ夕を学ぶう
しいつぐしいつぐでうろの男氏報じまうさん和い
秋ドさむまに撞くう君の歌亡さんといふ彼
人乃くいの毒ぐやいつぐ書の蝶乃網うの
まいつる蜂いをのまみけうこ云あやしなぐいう
みてう歌をばうんぐ我う志ぐいうしーこの
十が九い乞び失な城しるのしーのうこれし熱じ

三あんべさ方もれしかてこだなぐめくいのうあ強う
うるうるのうしかたん二三十人ばかりうあんてうるい巣
めうるあんあらうるみうるあう蜂の巣四五千ばかりあう
是をみる我うは同じ物をう結集くく力をうくあを
らんあかばうあれいかいざんん但其軍をうあるんあ日
いあうをうるあいて本機のかばあ但はうて
ちういさご蓑親ようあうれ物多くあるうあゆう
くゆううとうんをれいうるれうんうあう
ちうればう其日ちうんとうばんうていあとうて行よ
義さあるうけう事というればいみくくあうを

えうくあよかうれ故郷へ出くく彼是うれをう者をと
ばうて云我はうるうてうるいれ家後よ一矢射くを
あばやかうをうるいあ乃道いかうをあれ男をうば
云をれ強よ平ばうるうて五十人ばかり出くうう彼
屋造くあうをし夢のまくにちうひとれば是い何
乃あばをくあ中ここればうるばさゆあううて先
でうくちはうひをうれうを其紐よかのばをゆうを
おくばふ山ゆ鳥くのうをうを大なる蜂一二百二三
百うちゆれくいくうをを入巣るうを行いを家ゆ
うくうをうう日ゆ出るうをみ歌乃許へ是よ行う

しべき事あらせいつくくれば歌はしてあ
らんべかりしかるふいつくき事なりくて三百餘ど
のうち打出すりいさちいとくくぶるみ物の数しも
あるべ孫び侮りていたしうかけくむなどん蜂ども能
屋しり雲霞のごくくるれお歌れ人ごとに二三十
四五十取つくいなくし同梟くなくけくくて所
でくみさし損じけるなどふ物も出くべ打くくせ
じくみ六いくをもあるきいくみしくくすう力をてら
歌れ行来しもくべまんば白紙ふさべさつぎくな
なべくみさつなくし馳まつくて歌三百餘餘時の

程なく多やすくうち殺してけるとび鷲なく来れあと
み足を長よくうち死さるう蜂おくあるくれば公三置の
うくろれしんん埋て堂とさてなどくて年おとれ蜂
乃長日として恩を報じくうくまくいけうぐもたる子
孫もなるうもくれば此寺紙び歌乃孫よあるうくう
住師の祖父乃歌うし成るまう蜂の約束なるも
くて焼失いくれびいみしき鳴呼者也くて太郎良よ
つくくるされよくうすべくく蜂ハ短妙れ虫なれども仁
智乃仏有というされば京極太政大臣ふ捕公ハ
蜂といくくたなく飼ものいて何丸う丸とく紙付て

よびあつめられたるものをつぐいて格勤者をぐ紙勤
帯しをしたるよい何九菓さてごの紙々れいべその
間しおぞ物ゐまし々々生仕乃何い車れうう人乃
物乃人ゐはしめ紙々紙とまれとのゐ申ひ々れいべゐ
ま々々世りハ蜂何の大たとぞりをる不思後
乃使ゐ々しけ々人なり
六漢の蘭芝々雑紙ゐ々ゐ々ゐ々

きりあないみぢかくいとるぢこいくど敎して羽と
うちんとして世僧道然を敎て扇をとらをてこれを
允爲く敎ちかりつゆしき功德はくりとこいて
ゆくりぢふきれ堤乃をぢふ敎ようてゆうはは師
乃歩こ出くをくれぢくしぢよりとくれば久しき道て
くくんを道をようてをさんとちをるふ彼法師迎ようう
ていつかう法懸こ紙道蔭うて命はくはきばうの
脫屋をしてをぢいつふ僧道師てえうを道てね
法人ふりを問くればさぢ物ちこん東北院乃ふの
大路ていくき見ていはつる者法師よりはりはる者い

命ちはるてる物ふしかぢろれ法志ちはいうぢう報ぢ
ちさぢん何ぢにくも命はちる法報あるば一事
けくきんをのまいくんつちを法ちんふ神通と
はをれば何ういけぢんとふあをゆくめぢくの
なるはぢくれとむくいちぢくこゆやうふい
へぢゆうこをあるる先とゆいて我いは世のを道
あるし年七十れをれくうれば名聞利用あらこれ
し後世こて神をくしけまどをる祇いうぢる
へふをぢきれば乃れ及ぢ但釋迦ゆ来の靈こん
う說法し法いくん粉いこをりぢこるとくあと

世のいやしき身にて朝夕ふるまひにくき中か
ゆゑにて其内をこゝろ学びて人世のしゐんやと
をもふ事ありさまゆうの物まなびとなる紙おのまゝ徳と
すらあり中にいてちぐり松乃うへのふく奥にてよりう
ぬきて見紙ふるさぶて長きうへ仏れ経法の内容
学んなり見をびあけふるうへ位あるとをもふと
やはりおもすみ信ぶよ義しふるうでをのまゝふあ
ふくといふくとの峯れうへのぐりふとぐうう
してはの内容内のえ々しバ見紙ふあげふるとは
重ひてなり地い絆瑠璃ふ水木い七重寶樹と如て

釋迦如来獅子吼乃上ふみ中ふ仏を普賢文殊た
ちふ方丈しのつり菩薩聖衆雲霞のごし帝釈四
王龍神八部不しなくみちふそう空ふう四枝の華
ふりて雨ふ風吹天人雲ふみ列ふく微妙乃音楽紙
奏とゆ来寶殿ふ座して甚深乃法門を演説し
ゆ人具ふ方ふ大ふふ仏ふ集ふ及ぶふ志ぶこ
おいふしく学び仏をふうあぶ無ありてふれさふぐ
乃陽相ふりふ立垂の経法乃御りふりぐぶふ
信心ふつりおふりて隨喜の涙眼ふうふ渇仰のふ
骨ふふるあぶふ紙額ふあふく帰命頂礼ふ

なげかしみかなしびをちくけるたさつぐて方つる大會
うきくんつぐくに失の美のさもうぐおくこいるか
しつるぎとあるれさつぐて月後いをばりしありつる
ふ中者深也ひるあしあぐ〜ひく方べきあれば〜
よるふ水のくれなどにて方つる法師出来くさべう
ちぐうをつるくれを天ぐ〜まいて位を殺しあるれ
よりて護法天童ぐうまいうでうかぐうれ位者を
いをぐ〜うれぐとて報〜とさるくまつる同座集ま
しる法師ぐうもかるれ胆はぐて逐去ぬ已がかと
くれ羽ぐいうれて体あるとて失うりう

八 昔中天竺ニ仏滅後百歳ばうるて優婆堀多と
ト法果の羅漢ましいうる天魔のうあ芳恩紙ぐと
しるるを来あるるよりて何事あてて命によりて其報
答べきゆれこしりたに堀多を我仏のありさま
ねうく言くとなる学びまて月とべーとのるを
安事をれどもみくねうくるるるでこがうねうであ
うるべきゆれ天魔答るれいねしまぢをのるをあ
ゆめくとにうるめて林中にうれれるぐ〜く歩あるる
をるしい長を丈六頃いる緑青うて身金色ありえい
日乃ねうく出るぐ〜ぐ〜しる嫁多るれと月るるをて

の紙朱柳遠て不覚の涙ぬらす音信あけて行と其
時天魔もこの形よあらはれ釈法者角を隠て猶婚
とゝてこうきう今れ天物乃面変よいうつゞうう
人倫のうちいうち毋うせる習わく真例多くしべ
不可法唐うしハ
九 素姫皇妃ふて幸ふ様子ハ
立ようて両紙ゐてうつ出れ之位と接多
ゐ立ゐまいうう五ゐ紙れ爵ゝ是ゐうちのゝみ
ら と夏天ゝ道行人本法う深く衣紙ゐけ或い馬
て 水剣ゐの後を井ゐ況わく通ゐと ゐう賢ゝ人い

脱

ゆるさるまでもとゆかりの紙ばりを也方いと撰てお
さゆる才幹も有てよれ人をゆるれば世く失
わしども世にも人をもゆるさるも也大学卯わ
ゆ所いかゆ遊ありてつれ也てきたるいてるぶ〜詩
ゆれ名人てそれ〜と呼べ〜

楚思　炎范　雲水冷　高聲清　昵管　絃秋　白

此詩をば頌声ゆ名人ゆ新ゆ人ゆ名れども秀句
なるゆよりて四条大納言公任卿朗詠ゆ撰ゆれり
ゆるさむ物とゆ此桜花ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ん
見い延喜十三年亭子院奇合いらんの字二わるとて

病ゆ字ゆ活堀川左大臣
あまてとゆて金れ情ゆ合也ゆ金の羽こわれ
見い長元八年三十講の会人ゆ名れ
此ゆて勝ゆ名ゆ同羽ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名
ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名
ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名
ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名

十　中関白道隆公女　宮子　宮后一条院の御母也清少の中関白ゆ名
ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名
十日金の法ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名
ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名ゆ名

金春国貞の百学の旅うつし

中将殿人にしたがへてけうぐ金谷は花の盛の碎地花は
まことに白いくさをうつしたまひ御人涙を
拭ひ給ふ后宮みふねく情地をしけるみいつぐうまを
うつしを給ふ御のあやまりをあらはさ
よどもに契りし紙をとりあつめて涙のうちに
やうたてれ下のいろに結びつき給ふ紙美しく院
清涼殿にはまうさうさうまを出でぬ
ぬがえさを結まう

(十一) 後拾遺和歌集 後拾遺の紅葉あり
くうふ月ぐうの事をみて女房殿と人の

舟あまうさをうれ曉うし成ぐふ御ゆうに郭公一声
かのふかうくすぐ後拾一首俗でなわく地がしに
女房れ毎年れ出びうるを多うて淀乃浦のまぐよ梅
うれうわなぐ光らまうしけり除てうぐうき
人に感歌していはうとれどあくまくよみうん
うは海さわうかうんいうく秋くう

(十二) 通うさ清世うう玉葉の法ゆううれて祝くや
乃局みわる萩女房れゆんぐれさ出びて手うう海
と河ちくいうぐ市らんぎをとと地がしめけるまに
俄うをしいうせわくうふ取もあうどとうしを

咲きちらすそれぞ内侍の
ちるまでおてはてしるべよ
ゆくてよく内侍さ秋の
うるまうう

十三 後堀川院御位の時七月廿日ばかり花山院の雅
ちかや郎人ばかりて住いれる用院にて同中将なる
人うまかの若殿上人ばかく鬼の間の殿よみぐう
長くさ海ぐ物ぐうきをれ女房も豆盤所より
住て内外長うつを次よ大盤所のおなる御そえて
山おろし秋のまぶしやを笑うて和歌集一枚ばかりしを

うちにぐれと内侍の中に御ばかりやいて生うる紙に
中将いう方の枝ありやを榜とえあぐうた和の枝
ようれ住ばうあしあるうる雲客をうるいみし
うるうう貞親御御ばかりでんの茶ぬかりもう本の
和方の枝ものぐいいぐ先さうう紙藤原勝花
月枝とて本はあの稀人和こ兵秋のぬかあうれ
やあるう古こ紙思おあるうや

十四 殿上人の五月廿日余いくこれよ左宮う
まいりて殿うとうたうすくうふうう人の音
うのまうして本うればうるげやくいうれてのぞ

宇和侍ハ侍
并後撰の歌

さくらふたばのやうなる水よ蛍の光わくすぐくとりつく
さんたちる女房ゆしき蛍ふ集るゆしにてうの
まとてるるふ次なる人侍ちて蛍火乱花
ゆしにすぐいくゆさ次なる人夕風り蛍飛てと
うちるぐしちるるある人うくれぬ物いなのじしのと
ゆふふひうぐらうくるとうぐに風ちく世
しうて世男何といよ一ぬしもあうんがかいふ
くて移どるさとし出ようくればされなる女房物
おうしや蛍たもあるの方をるとうて行やく
ちうだうるもうれもなくうちちうくるこの歩か

今和信りう
おくり

ちたのかぐあまりに色深く咲うて見くくうん人うい
うちなく虫よりもあうてうしにて石をうきる
見まさに入るかぐ塀ぐく地くゆうるとうあて
死ぐ女やちくかぐくうこのあうい

後拾
春をてさいかの蛍よりも知ぬれ
相手の

十五 陸奥守忠度朝臣家の物ものさしして局の
ものさしてをしみつしもけゆくあうしうれど
さくの扇に文よくれば扇紙つくふついみして
ゆ知をくれば局乃知の女房はて名うて歩也
みすぐく虫の移よく歩うくうる紙同く扇をけうし

やまもり人ちゞまりゐてゆげとうろたへ女
房をでゝ扇いつゝい給いざうつるをつゝれいざかし
まとゝゆえつまゞくとうろいゝわけうるもろう
ひとのすがたにすくせのひよ秋さに初秋いとて社ゝく

(十六) 左衆ちる所ちろうぐさ女房れ色このじゆりて
ゆえて上乃男も九月の廿日れあうるもろるよあまさ
ゝ所ゆさうけうゝいゝ初さいろ家れもゝのこれ下た
きゝの春ゝくゝゆえうゝ初しらい阿女ろうを
のきゝさ村をぐらていゝあれたるふゝろ法ゝく
ゝゝ口すぐいて中門の廊ゝゝきゝ下ゝかのゝ

年初侍ゝゝ

ゝすゝみゝうゝゐるゝぐゝしゝうろ行ゝよ薫のゝゝのゝゝ
ゝうゝゝて人ゝゝの門ゝうゝゝん人ゝゝ岩物秋風
遠塞情ゝゝなゝぐゝゐゝゝもゝうゝ人ゝゝゝゝゝゝ事
ゝぜゝ云ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

(十七) 後德大寺左大臣小侍従ゝゝえゝ通ひ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
此人乃侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
でゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆて行ふべき事なり孫ば屋ごて走つて入く車よせに
如乃ゑてゑ前よつゆあてよせ〻作といれたるかく云
つく〻ゑれど何とゑべし大ゑてゑよ折しも里の雑
こゑぐ明かゑうゑれい

物うて君ういかゑもの〇れけとしもゑゑ恐つゑん
ゆてぐゑういかゑもそやぐて走つゑて車よせゑてか
くこゑをゑて作つまゑゑれいいみぐくめぐゑれゑう
さてゑて使よいゑゑいかゑ接よい和歌みぐを
ひゑうゑゑぬちゑ上東門院の伊勢大輔が墨する
行ゑけ九月ゑれゑゑ前と紫で得一同といゑうあゑ

同ゑこいえもいゑゑ花の色ゑれ乃末の白紙付ゑう
ゑゑ公れゑゑされも神ゑゑ〻ゑゑて少ゆを能義人い問
理乃六位なゑくやさゑき義人といゑれゑう

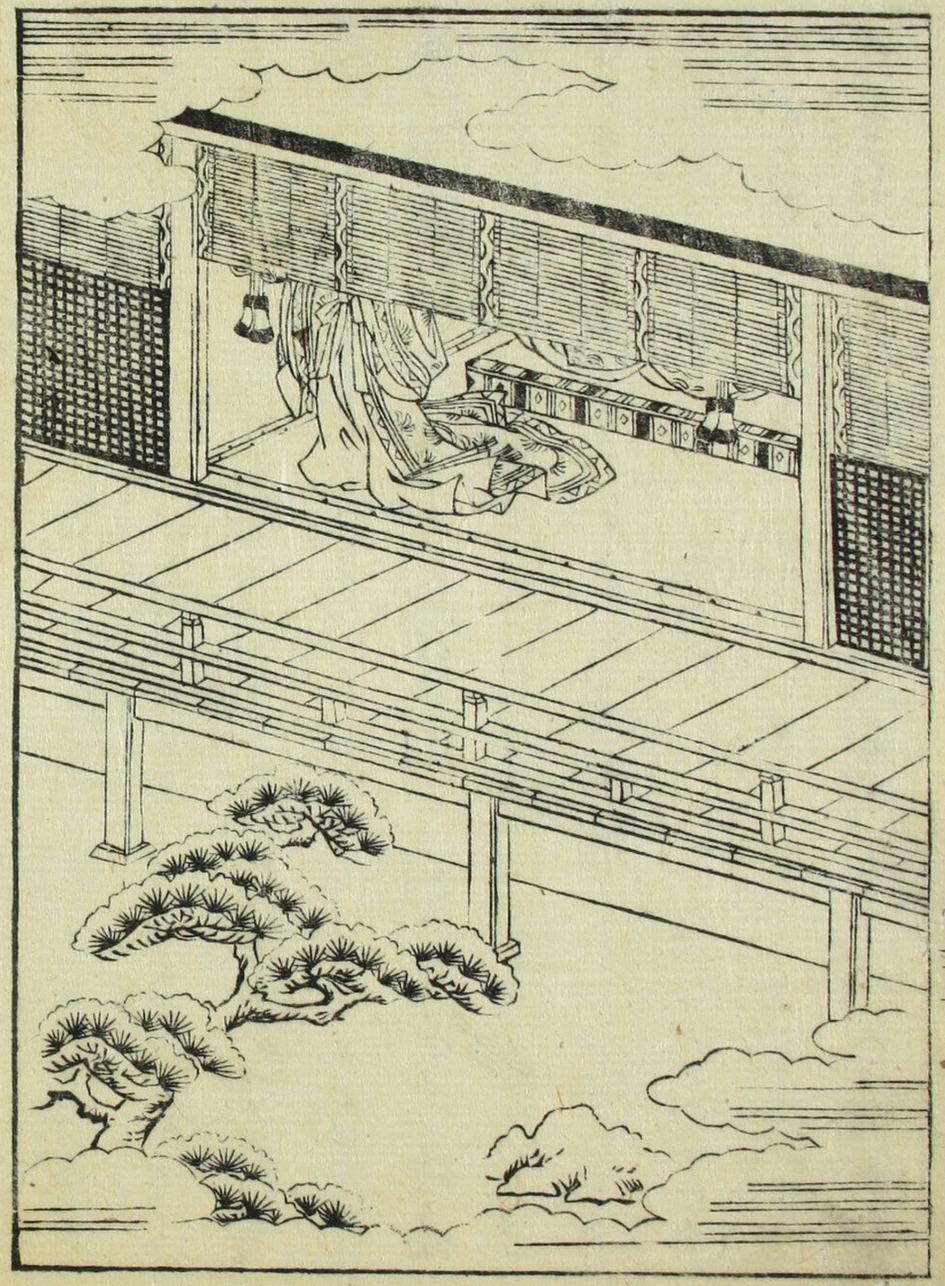
十八 武平ゑいふ舎人のゑわくゑまゑるゑの姫人事有
ゑゑ麝香と求ゑゑゑふ長紙易ゑさゑれいゑゑく
ゑい由いゑれゑゑさゑ人ゑ白ゑゑゑばゑうゑに
ゑゑゑゑゑけゑゑ神ゑく色ゑ出ゑゑゑゑ〇て伊予
大納言けゑゑゑ侯の人ゑ物ゑとれゑゑゑれゑゑい
てゑゑふゑゑて中門ゑ方ゑゑゑゑみゑ入ゑれば
ゑこのゑゑゑ有ゑゑゑ家の寝殿のゑゑ有く

彼(かの)をうるふるをぐるの香をふくりて海てくゆ
傷ましうそばうりかてて扇紙うらをとてけうしの
まいとしむ何事にきこしまさぐと同紙をれば
ちうく事の行ゐ也しかえうまづ世中の物語
をぐしまいうる程よりなの彼(かの)ちうれば白さ衣
あをを縫(ぬう)さ行くうやをぐしもてぞ居ないう
うう出をこちをう付紫乃七をうしかうう楽
はしうにをしはうてをげいぐそれうしうしかちて
傷りをうしかて口うう行うう

(十九) 一条院内付賀方中れ陰付(うんのまつり)系の試(しぐ)ものて

まてかぐれ行行ぐでを加(くわ)えて竹の葉(ふう)
すえうをて異(それ)乃枝をれてはうう乃ぐ
さうしうをあいう異是より後紙系うし竹乃
枝をさすれう

(二十) 同院雪ふて面白く降(ふる)うう細編(ほそあみ)近く出居
さをうく雪はうしけう香炉(かうろ)峯のあうさ後
ふうんと作をそれいば清少納言清家うし作
ううが中事いをくてうをうをあげうをうう
世の事まて傷うう例よを作をうう彼香炉峯
乃事ハ白楽天老乃行世ふれ枝すをあ一れ草



堂氏志乃乃ゆ乃詩乃

遺愛寺鐘欹枕聽　香爐峯雪撥簾看

かゆ乃氏帝御あさし乃ふよりて清少納言ハ天暦の御時に宰相の中人ハ奇
なり彼清少納言ハ天暦の御時に宰相の中人ハ奇
仕清少納言ハ天暦の御時に宰相の中人ハ奇
乃ち氏物語作り乃

紫式部　越前守為時女
伊勢大輔　補親女
新小弁　多多議廣業女

赤染衛門　大隅守時用女
出羽弁　出羽守義信女
小弁　越前守懐尹女
馬内侍　左馬頭時明女
中將　道雅女

和泉式部　大江雅致女
小式部内侍　道貞親王女
小大君　重明親王女
江侍従　匡衡女
宮内侍　高階成忠女
左衛門内侍　信濃守隆信女
安房

どもあまたのうろをすぐく帝賢をたくわへし
けるをや才能智慧ありけるをやく道てのうるを
いてうるぐ皆真名紙をうるを中にも四納言多
えしい斉信公任俊賢行成也漢の四皓の無
住をうんも此人をうんもいてはさんとぞうるを
僧りい横川の慈恵大僧正寛沢僧正寛朝か
どをうるを大内をて立壇乃法修をうれ
ぐるを慈恵不動をたり寛朝ハ降三世を祀
しておも奉るをようるをうるを孤の信ないさも
なるをうる四献院ぬさしく此をを法修をを

を久る番僧をうて此法師の人をうれば帝
も我人をうるを奉延喜天暦ともを法自讃
をうるをうり
四をうや此法師一乃不思議をうを上東門院
乃法方の御帳の内乃大はをとうをうを
ゆしいうけど者をうをれば大をうをを
をもをいく江匡衡といの帳をとれけをば
是目お変れ古来をり大のをいの大乃をのそをり
題をとををうを真題をとををつをを天也下たつをば
大也真下をのをを紙をををれば天ををを

たまたまもよほすべきうたれば たまはれさをうらいて
天子のいでましをのべ[illegible]そでよもをうのうちに
あまの宮子法師延生あらそはれく位よ昇殿へ給
一条天皇是ちり医師月乃才あるうのこ
あまばうほうぶどもこもも深うろうろ同帝まれ
まうした上東門院ものあたるやまをあいうれば
法堂乃入道殿さうぜうしく法師ふるを法
陸奥をあをて出さををうくこいうぐうこ法
編経あぐ重くすぐさく作ま乃同法編い
まぐ終ぐざるふ翻解由相公有国にいまぐあうう

つまたうたれ乃公法師ふうあうあうあ重て
法編経よ乃ぐぐうぐと乃ぐふ女房くうつま系
て法師ふぐあ成あるあ乃乃ふうさて落居のな
有国紙をうてうふして市聖成あうといあう乃
ぐぐとうをあまよ陸奥ふ紙さまうまま書くく作
うあうあうあてれうまい市聖ちうあとい有ふ
はうまうまう